

## 非暴力直接行動と非暴力

### しのだもりの

いえないと思うし、坐りこみをされた側は、暴力と思うにちがいない。したがって弱いものが強いものに向う力は暴力でないとはいえない——つまり暴力だと言います。

リベルテール十月号に「非暴力を考える」鈴木光一Vという文章がありました。この筆者は、遠いインドの国の「あまり親しむ機会がなく、わからない」ガンジールの非暴力は想像しただけで、「ああすばらしい」と嘆じるのに、自分が判別できる身のまわりの人々の非暴力というものは、「何ともやりきれず、我慢のならない」ものだそう、その例にあげられているのが、私たちのWR Iらしいのです。

「闘いの中で死ぬほどの覚悟さえ持たない非暴力は、権力に対して、せいぜいひっかき傷ぐらいのものしか与えることができない迫力を欠いた行動、と云われてもしかたがないだろう」——これは、直接行動創刊号「私の非暴力」水田ふうVの中にあるものですが、鈴木さんはこの数行を引用しながら――

「引っかけくことも、すわりこみも、デモも非暴力とは

暴力だと自分のいい方に変えてみただけで、べつにどうという問題ではありません。(ただしこの鈴木さんの論理では、銃でうつのも、シユブレヒコールをあげるのも同じ暴力ということになります。粗雑な論理といわれても仕方ないでしょうね。)

そこであえてつけ加えれば、WR Iの云う非暴力は、「直接行動」と同義不可分のものとしてはっきり提出されている。のに鈴木さんの非暴力は全くそのことを無視することで論理としている——それゆえ鈴木さんのいう非暴力とは、主人に忠実な奴隷たちが口にする非暴力にもなりかねない——そういうものだということがわかります。わたしが、WR I以外の暴力論をきいていつも感じるのは、論者はもれなく暴力について通俗的な固定概念にとらわれていて、しかもそれをきわめて恣意的、感覚的に語るといふことです。それゆえに私たちが云えば、

△個人暴力Vと△社会暴力V（構造暴力と云うと、もっと判りやすいかもしれない）と区別することなく、全く同質に暴力として論じること、その暴力論を混乱させている―現代暴力論ノート―ということです。

つまりWR Iが前提としている「いまわたしたちが問題としなければならない暴力は、権力機構としての、組織としての社会暴力である。―同書」という視点が全くないのです。それはまた非暴力直接行動を全くとらえていないことを意味するでしょう。

つぎに鈴木さんはこう云います。「正当防衛的に、暴力を振うものの暴力を防ぐのは、例え物理的であっても暴力ではない。―というのは御都合主義に思えるのだ。ここでは暴力は言葉のアヤになっている」

この△：暴力でないVというところは、現代暴力論ノートの次の箇所の要約だと思われます。

「△反暴力としての非暴力V。絶対状況下の暴力に対しての△本能的な対応Vは、もはや暴力的、非暴力的という概念にとらわれないものとしてあらわれる。それは正当防衛とも呼ばれ、通俗化されているが、本質的には△生命力V△ちからVの発現であり、とくに名付けるな

らば△反暴力Vとよぶべきものである。

すなわちその対応は、△暴力的Vであっても

イ、発動の限度、範囲が規定されており、

ロ、状況に応じて自己規制ができ

ハ、必要以上の加害が行われない

ことにおいて、それは△反暴力Vである。△反暴力Vであることによってまた△非暴力的Vである。」

私は、個人暴力をこの△生命力V―反暴力―という点において理解しますが、鈴木さんは△ノートVをたしかに読んだらしいのに、故意か偶然か、まったくその省察や言及が見受けられません。それに天皇のテレビ初出演演のセリフかどうかは知りませんが、言葉のアヤという云い方がはやるのはいやらしいですね。ともかく他者の主張に対して一言あるときは、それが何を言っているかを充分読み取った上で云々されないかぎり、ナンセンスな自己顕示と云われても仕方がないでしょう。

もっともこのことばはまた私にもはねかえるものです。それで鈴木さんの文章を何回か読みかえしてみました。が私にはその論旨の組立てがどうしてものみこめませんでした。多分私の悪い頭のせいでしょう。それでここでは一切ふれることをしません。ただ鈴木さんの論文を引

書き出すものとなつてゐるふうさんの「私の非暴力V」を改めて読んでみました。

創刊号でふうさんの「私の非暴力V」を読んだ第一印象は、ちようど朝の起きぬけに窓を開いた時、最初に吹きこんだ風を一息すったような、新鮮な刺激でした。私が「もうれつふうちゃん」などいう、そのままの気迫が伝つてくるよい文章だと思ひました。そしてその時「私の非暴力V」を、「私はこんなふうにいま、非暴力直接行動を行つてゐるんだ」というように受けとつていたので、だがそれは、もう少し微妙で、私の非暴力が非暴力行動から非暴力直接行動へと移つていったそのことについて語つてゐるのだと判りました。

さて再読しながら、私が自分を納得させるためにしてみた分析によると、鈴木さんの引用ケ所（三十五頁五行目まで）は、現在のふうさん！非暴力直接行動の意味をしつかつかんで――の発言、そして東アジア反日武装戦線との関りの記述は、ふうさんの「非暴力V」の内容の變せんが現われているもののように思えます。

つまり、当初の国家権力の巨大な圧力をまだ意識することがすくなかつた未経験の十代の世代が、あたり前の抗議行動として、デモや坐り込みに参加しながら、十年

あまりの経験のなかでしだいに、実は命をかけて対峙しなければならぬものとして自覚されてきたということ――はじめ頃のそれは、まだ「非暴力行動」としか云えなかつたものが、非暴力直接行動へと進み出てきた――経緯が述べられてゐるといふことです。

だからこそ「私の非暴力V」で、自分をもふくめた通俗的「非暴力V」の標榜者への批判がかかれたわけなのでしょう。――せいぜいひっかききずぐらいのものしか与えることができない――「非暴力V」なんかではダメなんだ！――ところが鈴木さんは、その点をきわめて恣意的に切りすててゐるようです。そして自分の論述に都合のよいようにふうさんの文章の部分を、自分の立場を正当化するだけに切取つて利用してゐる、としか思われません。もう一度、ぜひ読み直して下さい。ノートも含めて、そのもっとも重点の部分をとらえて批判して下さい。――私は鈴木さんに言いたいと思ひます。

それから、鈴木さんの文章が、その末尾に書いてゐる「僕は提言するのである。非暴力を自分はどう考へてゐるのだろうか。考へてみようではないか」――について、全面的に賛成です。念のために言えば非暴力とだけでは誤解があるかもしれないので「非暴力直接行動V」を

とすれば、より論点は深められるでしょう。

## 殺すといふこと

### 市川白弦

——本誌二号五五頁上段初行の「反と不反とを論ぜず。」は「及と不及とを論ぜず」のミスプリントでした。書きたいことはこれだけですが、これだけではのせてもらえないかもしれないので、以下蛇に足をつけることにします。

禪僧沢庵(一五七三—一六四五)といえば、三代將軍徳川家光のブレインとして、柳生但馬守宗矩に劍術一如の思想——「不動智神妙録」——をさずけた禪者として有名だが、かれの法語「安心法門」の中に、後醍醐天皇と徳寺開山大灯国師宗峰妙超(一二八二—一三三七)との問答をひいて、解説している。現代語訳するところである。

後醍醐天皇が大灯国師に問われた。わたしが天皇の位

についてから、天下乱れて多数の人々の命が断られた。その罪はわたしに帰するであろうか。大灯答えて、たとえバカケが崩れて魚が死ぬとしましよ、そのバカケは無心であつて罪をつくりませぬ。陛下がもし無心の法を体得されますならば、一日に千人殺しても、毛筋程の罪もありますまい、と。この大灯の論理は、大灯がどこかで読んだものであろうが、正確には昭和の初め中国の敦煌(とんこう)から出土した禪籍の中76から発見された「達摩和尚絶観論」として、鈴木大拙によつて発見された、この「絶観論」に見られるものが最古の発想である。柳田聖山の現代語訳の部分は「問うていう、「いったい、ものの生命をとることのできる条件がありますか」。答えていう、「野火は山をもやし、暴風は樹木をさき、くずれたガケはけものをおしつぶし洪水は虫をおぼらせる。きみの心がこれと同じなら、人だつて殺すことができる。もし、とまどいの心があつて生命を意識し、殺生を意識し、心の中に吹き切れないものが有る限り、たとえアリ一びきでも、きみの生命をし



ばりあげるのだ。」

達摩という人が歴史的に実在したかどうかは不明だが達摩という人名に帰せられる禅思想は、古代から厳存する。そのダルマの中心思想に「無心論」がある。ダルマの安心（あんじん）説の中核は「無心」である。ダルマの「安心法門」を引いて解説したのが、沢庵の「安心法門」である。沢庵の『不動智神妙録』の中心思想もまた「無心」である。

後醍醐天皇と大灯との問答に帰ろう。

「陛下が無心を体得されたなら、一日に千人殺しても全然罪にならぬ」と大灯はいう。この問答は変である。天皇は過去の人命の破壊について尋ねているのに、大灯は天皇が将来禅を体得したら罪にならぬという。答えになっていない。それまでに失なわれた無数の生命への罪責はどうなるのか。また天皇がすでに無心を体得しているから、罪にならぬという意見であるなら、どうして罪にならぬか、その道理が明らかでない。天皇は無心で罪がないとしても、殺された人間たちはどういうことになるのか。天皇が自分一人で殺したわけではない。無心で殺

しても、無心でなくて殺しても、殺されたことに変わりはない。われわれ人間は、山津波が人畜を殺傷すると全く同じように、無心に殺傷できるのが。レーニンのロシア革命はどうだったのか。「歎異抄」の「わが心のよくて人を殺さぬにはあらず」というジンランの言葉と、ドストエフスキー「悪霊」(?)の「神が無ければ人間は何をやっても差支えない」という考えと、さきの無心の殺生とは、どのように比べられるのか。

核戦争の世紀には、「生命を意識し、殺生を意識し」

(絶観論)なくて、案外「無心」にボタンを押すだけで

77

何十万の殺生ができるかもしれない。もしも人間が無心になったら、人畜の殺傷はおこらぬという意味ならば、「絶観論」や大灯の言葉は適切ではない。近代日本の大悟した禅者が、例外なく戦争を支持し、階級闘争を否定してきたのはどのような「無心」なのか。無心説は時として犯罪的な主観主義——「耳を掩うて鈴を盗む」——の自己ギマンをふくんている。前号の「及と不及とを論ぜず」という知恵にも、真実と虚妄とが背中合せになっている場合がある。

# 罪惡はまだは過去世についで

ヤポネシア列島住民

H

この世における最大の過失—もしくは罪惡、失敗は、人間が子供を産むことである。男女が協力して 山道を登るほど あえぎながら……。うん たしかに そうだ

なぜか。私達の子孫は医薬品の發達(?)で サリドマイド児のようにされ 医者注射によつては 大腸筋短縮症のようにされ 厚生省と食品コウ害によつて 肝ぞうや心ぞうや脳を犯され 文部省と親たちによつて 肥満児 精薄 狂氣 プロゲリア(少年でいながら 九十才の老人のような兆候を現わして死ぬ)等 は ますます増え 運輸省の協力参加によつて 交通禍は飛躍的に増大し 司法官の活躍によつて正義・良心はちっ息せしめられ 百年ののち たんぱく質の減少・食料難は 先ず死人食からはじまって 人間が生きた人間をねらつて殺し合うようになる。かならず そうなるぞ。川や海は油で真ッ黒。酸素は欠乏。田中角栄や岸信介、椎名悦三郎よりも百倍もあくどい

(つまり表面紳士的な)ゴロツキが 総理大臣となり 批判めいたことを心に抱こうものなら 現に韓国で行なわれているように 何ヶ月もかかつて指を一本づつ切られて指のない人間 ガスバーナーで顔や手足を焼かれて ふたと見られない人間……ばかりになるぞ。

現に政治は 財界は 大部分の官僚・司法官は たしかにちっ息死して居るじゃないですか。大部分の学者、評論家、宗教家、マス・コミ人、教育者、政党、労組人は すでに死斑 腫弘拡大 脳死 心拍停止 チアノーゼ 硬直 の症状が現われているじゃありませんか。

再説。諸惡の根源 万惡の叢源は 子供を産むことである。分子生物学・遺伝子工学の發達は 五〇年〜三〇年後に超人間半人間 1/4人間を多数産みだすであらう。子供を 一切産まなければ 一代二五年ないじ三〇年として 五〇年後に地球人口は半減しよう。七五年ないじ九十年後には五分の一以下になろう。一世紀ののちは十分の一以下になり その以後 が速度的に減少しよう。(二代も三代もつづいて子供がなく、子供を熱愛してい



る特殊な人には 一人までを限度として出産を認めよう。その他どうしても子供が欲しい人は兄弟姉妹の大家族について一人だけは認めると 人間の絶滅だけは防げよう)

顛腦の男系および女系の子孫は第一番に廃絶。

かつて深沢七郎氏は 東京の人口が五十人くらいになると ちょうどいい、と説かれた。(「人間滅亡の唄」徳間書店)ワイは もすこし おだやかで 東京も二人くらい、あるいは二・三万人くらい いてもいいんじゃないかと思う。ヤポネシア列島に 五〇万人くらいいいんじゃないかと思う。(縄文時代前紀ごろかな。その前かな)

内服避エン素「ビル」を製造する会社(又は組合)だけは 何をおいても残しておかさ なるめい。

## キクモンについて

ベラボーム クソツタレノド阿ホノ 顛腦旗や 旧染列車 碎判所 旧群営 などに掲げてあったキクモンは痔の広告ではないが 肛門のヒダを象徴したものである

ことは諸君もよく御承知であらう。ソラ、オカマのことを菊印って言うだろ。十一辨かの議員バッジはそれを少し簡略化したもの。(ダカラ 奴ラ ロクなことはしない。いつもくさい。)

肛門は人体のはぼ真ん中にあるもので たとへそれが下についていようと そのことだけで差別・軽べつするいわれはない。

肛門のヒダを 菊花の花ピラ ゴモンショウ と錯覚することにおいて 政治家・官僚はもとより この国の学者・評論家・宗教家・教育者・財界マスコミ人等の大部分が 迷路いらいあのような戦争を起し あのような非道な 教育を 行ってきたことがどうしても許せないのだ。ワイセツ以下だ。

(註・ねず・まさし「天皇と昭和史」三一新書一には明治二年の法令以前には約七〇家の大名等がキクモンを用いていたという。ワイが、キクモンは肛門のヒダ説を信じるようになったのは、こゝ四、五年のことに過ぎないが、いいだも「なぜ天皇制か」(三一新書房七六年三月刊)の表紙カバー及び裏表紙カバーには菊紋が三分の二、三分の一に人体の裸のお尻を色刷りで

表現している。ことをつけ加えておく。その他鳥越憲三郎「古事記は偽書か」(朝日新聞社刊)など参照。なお深沢七郎「風流夢譚」は奥月宴の小説とともに、奥崎謙三「宇宙人の聖書」に全文を収めている。発行

所は神戸市兵庫区荒田町二・五 サン書店、本年三月の発行、五百頁の大冊で領価九百円)

—小 五一・一一・一〇日

(思・文・集B)

## 意見陳述

補佐人

荒井幹夫

いわゆる「連統企業爆破事件」「天皇の列車爆破計画」なるものの被告として、いま、ここにいる六人の諸君が起訴されています。爆破を施行した東アジア反日武装戦線の「行動綱領だった」(一九七五、五、三〇朝日)として「腹腹時計」の一部も新聞に報道されました。荒井まり子の起訴状には「前記反日武装戦線人狼<sup>△</sup>に加盟し」とあります。もしそうだとすれば「東アジア反日武装戦線」とは何か、何を考え、何を実行し、何がいま裁かれるのか。私にわかる資料は新聞が報道した、爆破事件のその都度の声明文と、腹腹時計の抄録です。誰が何をしたのか、起訴状にある訴因はほんとうなのか、間違

いなのか、私にはわからないことです。

刑法は行為を罰するので、その思想を罰するのではないと聞いていますが、行為には動機があります。特にこの爆破事件は、その声明文から見ても思想性の高い行為であり、その行為を裁こうとするなら、その思想を裁かねばなりません。

マス・コミは故意にその思想性を抹殺して報道しました。①特に爆破の実行々為がない天皇の列車爆破計画は、その思想性だけが問題となると思えます。この法廷でも被告とされている六人の意見陳述が時間や内容の制限を受けて、十分に述べられていないことは極めて残念なこ